

## 非日常の空間―理髪店の社会学（一）

原 田 隆 司

### はじめに

二〇一五年八月下旬、木曜日の午前一〇時すぎ、僕は散髪に行く。待ちたくない  
ので、できれば先客がいないほうがいいと思う。今回は、お盆のあとで、盆休みの  
最終日という可能性もあった。お盆には、帰省した人たちが散髪に来ることがある  
ので、盆がすんでから休むということを知っていた。

兵庫県西宮市内の自宅から電車で一駅、踏切を渡って川沿いの道を進む。信号の  
ある交差点を一つ渡ると、右手は小学校である。今は夏休みで、しずかであった。  
スーパールの店舗と作業スペースの間にある狭い道を抜けると片側一車線の道路に出  
る。ここではじめて、あの赤、青、白の線が回転しているのが見えた。休みではな  
かった。まず安堵する。

車の行き来を確かめて道路を斜めに渡る。間口が狭いので、ガラスの扉に近づく  
ないと中の様子は分からない。近づいて覗いてみると大将は散髪をしていた。先客  
がいたのである。

いらっしやい。

入ってすぐの傘立てには、濡れてなさそうな上等の長い傘が一本立ててある。そ  
こに僕の濡れた傘を入れる。

ここから散髪屋さんでの時間が流れる。ソファに座り、テレビの音声を聞きつ

つ、スポーツ新聞に目をとおす。先客が終われば「おまたせ」と言われ、あの専用  
の椅子に座り、大将が髪を切り、剃り、髪を洗って乾かしてセットをしてくれる。  
それらが終われば、椅子から立ち上がり、ブラシではたいしてもらい、お金を払って  
店を出る。

散髪の帰りの道で会う風が風のなかではいちばん好きだ

（岡野大嗣『サイレンと犀』書肆侃侃房、二〇一四年）

歩き出すと、そんな気分になる。

多くの男性にとって散髪とは、それだけのことであり、たいてい一時間以内には  
終わってしまう。簡潔に言えば、髪を切ってもらうというだけの時間である。しか  
し、そのためには散髪屋さんという場所にでなければならぬ。

衣食住や遊び、仕事など、日常の行動がいくつもあるなかで、この「散髪」は独  
特の位置を占めているのではないだろうか。そうした問題意識をもとにして、これ  
から「理髪店」について考察してみたい。

### 一、巡り会い―常連さんの話から

この日、僕の前に散髪をしてもらっていたお客さんに、いろんな話を聞いた。

僕 …もうだいぶ長いこと、ここに来られています？

大将…もう長いな？

客 A…長いでんなあ。

大将…ね。まだ現役の時代から、ずーと来てくれてはるなあ。

僕…何年ぐらいですか？

大将…もお……

客 A…現役やめたんが平成一三年ですからね。それからもう一四年でしょ。

僕…はい。

客 A…歳は、もう、はちじゅうさん、ですから。

僕の問いを受けて、大将が言葉を継いでくれる。散髪屋さんというのが、よく考えれば面白い場所であって、そのうち「研究」するかもしれない、と前から伝えていた。それで、この日、了解を得たうえで取材をはじめた。Aさんは、たまたま僕の先客として居合わせていた。僕は、これはよい機会だと思い、質問をはじめた。大将は、Aさんの当惑の度合いを少しでも低下させようと、あいだに入ってくれた。

僕…お住まいは、この近所ですか？

客 A…近所です。

僕…歩いて数分？

客 A…歩いて、七分ぐらい。

僕…あのー、散髪のことを急に聞かれても答えにくいと思うんですけど……ここ、もう何年ですか？

客 A…震災以後ですね。

大将…そやなあ。

僕…それまでは、どこでやってはりました？

客 A…散髪？ 会社の近くやなあ。

客 A…会社の近くでね…

僕…会社はどこやってんですか。

客 A…尼崎やつたんですよ。

僕…ほんなら、仕事の帰りに…

客 A…帰りとかね、ちょっと休みの時にね、向こうまで行つてね…

僕…わざわざ？

客 A…尼崎でしたからね。

僕…そこも長かつたんですか？

客 A…四八年、勤めさせてもらいました。

僕…散髪屋は？

客 A…その近くの散髪屋。

僕…長いこと、おんなじとこ？

客 A…そうです、そうです。もう、あんまり変わるのイヤでね。

僕…ねえ。

客 A…僕はね、髪が多いんで、上手にしていたとこやったら、ずっと、もう決めて、そこばっかししか、行かないですからね。

僕…その後、ここへ来るようになったのは、何かきっかけがありましたか？

客 A…きっかけ言うてね、僕もまあ、このへんに住んでるわけですしね、で、僕が散髪屋さんを探しとった時にね、たまたまこちらにきて、この「〇〇」のご主人と話がね、いろんな、もう雑談ばかりで…。

僕…もう、一回目から気に入った？

客 A…気に入った、というよりも、もう、ご主人の性格ですわ。

大将…フーリングが良かったんや。

この一連のやりとりから、散髪屋さんと常連客の関係が分かる。そこにはいくつかの要素がある。

まず、場所としては、自宅か勤め先の近くの店を選ぶ。そして「上手にしていたところ」を選ぶ。そして「ご主人の性格」を気に入り「雑談ばかり」するよきな関係になっていることも重要である。

決まった散髪屋さんに通うという日常の行動は、こうした要素から成り立っているのだろう。所在地と技術、そして散髪屋さんの性格。この三つの要件が成り立つところが見つければ、「あんまり変わるのイヤ」ということになる。

このやりとりは、まだしばらく続いた。

僕…僕が動けなくなるまでは、やっとしてもらわんと困るわ（笑）。だって、新しいところ探すの大変ですもんね。

客A…そりゃ、そうや。

僕…意外とね。

客A…いや、自分の好みの散髪屋さんいうたらね、もう、なかなかね、巡り会えませんよ。

僕…ほんま、巡り会いですよ。…だいたい、どれぐらいの頻度で来てはるんですか？

客A…僕はね、髪の毛、こんなんでっからね、二ヶ月に一回しか、来ませんねん。

僕…でも、今、二ヶ月でだいぶん伸びますよね。

大将…二ヶ月いうたら、よう伸びるよ。

僕…僕は三ヶ月やけど。

大将…あなたのは三ヶ月やろ。

僕…僕は三ヶ月と決めてるから。その二ヶ月は、その、お勤めしてはる時から、二ヶ月間隔ですか。

客A…二ヶ月に一回くらい。

僕…若いときからずっと？

客A…ずっとです（笑）。

僕…刈ってもうてから、次に行く時までって、二ヶ月が近づいてきたら、なんとなく気になります？

客A…なりますよ、やっぱりね。夏やし、これ早う伸びてきよるやろな、とかね。

大将…な、もういかなあかんわな、と思うやんな。

僕は、この散髪屋さんに二〇一〇年七月一日の日曜日、はじめて行った。大将ともう一人の職人さんがやってた。待っている客もいた。その一年前に、それまで長く通っていた散髪屋さんが店を閉めたので、自宅と職場のあいだで数軒の散髪屋さんに行ってみた。一回ずつやってもらっては次の店を探し、ついに通うことに決めたのがここだった。それから三ヶ月に一回来ているので、二〇一五年の八月は二〇回目になる。

買い物や飲食などの「なじみ」の店、あるいは歯医者など、決まったところに行くという日常の行動は他にもあるだろう。しかし、髪の毛は常に伸びているから、どうしても一定の間隔で散髪に行くことになる。他の「なじみ」の場所は、必ずしも一定の間隔で行く必要はないだろう。反対に、散髪屋さんは、例外的な場合を除いて、毎日通うところではない。

だれもが定期的に行く場所としての散髪屋さん。どこにでもあるようで、なかなか決めることができない。うまく「巡り会う」ことができて客のほうが決めてしまえば、同じところに通い続ける。「自分の好みの散髪屋さん」でなければ、行きづらいものになるだろう。それは簡単なようであるが、実は「巡り会い」なのである。

## 二、お客さんのサイクルと数

大将によれば、一年のなかでお客さんが多いのは年末である。一二月でも二〇日以降である。「やっぱり、正月、伸びとったら嫌や、いう人おるやん」という。三日まで「フル回転やな。ずっと忙しいわな。今、一人やから、余計…」。二人も三人も待つことがある。逆にいえば、「それ以外は、いつでもできる」。

正月は一日から四日か五日まで休む。そして、八月の盆休みが三日。あとは毎月の第二、第三の月曜と火曜、それ以外の週の月曜日が休みである。

一週間のなかでは、土曜日と日曜日が多い。しかし、多い月と少ない月があると

いう。

大将… 今月、暇やなあ、と思ってるやん、土曜、日曜。ほんなら来週、来月、忙しい。二人でやつとつた時も、そうや。今週、土曜、日曜、ヒマやつたなあ、いうて職人としやべってるやん。ほな、次の週またバタバタする、朝から。そんなもんやん。お客さんって、そんな回りやん。

一日の中では、どうだろうか。

僕… お客さん、平日は、朝から晩まで、バラバラに来てはる？

大将… まあ、バラバラに来てくれるなあ。

僕… 平日でも、二人、三人、待つことある？

大将… あるよ。朝から、八時に来る人、また、二、三人、連続で来る時あるよ。みな待つてはる。もう帰らへんもん、うちらのお客さん、うん。もう、刈りながら俺としやべったり、ほんなん好きな人もおるやろ。

僕… もう、ファンやもん (笑)。

大将… ファンでもないやろけど… 月に一回のコミュニケーションやん。

常連客とは、散髪屋さんの場合、一定の間隔で来る客のことである。気が向いた時に来るのではなくて、髪が伸びればやってくるのである。これも一つの特徴といえるだろう。

僕… 朝八時なら八時、何曜日に来る人とか、だいたい見当ついてる？

大将… ああ、つくよ、うん。ぜったい、この人は、今日、開けたら、店開けた時に、あ、この人来るな、思ったら、ほんま、来るよ。絶対来る。やつぱし、俺のテレパシーが行ってんねやろ。そら、ほんま、絶対、来てくれる。

僕… それは、最近のこと？

大将… いやー、もう、ずっと前からや。そういうサイクルになっとんねん、お客さんも。な、二〇日やったら二〇日にいつべん来る人。いろいろ、いはるやん。ほな、もう、一〇日やったら一〇日に来る人、絶対いはるからな。一六日に来て、こんどまた、三〇日にもう来るもんや、ほな二週間や、その人は。絶対、二週間に一回来る。もう、気色悪いねん。頭が、気色悪いねん。もう、耳のそこ、当たってくるやろ。その人の性分やな。

僕… そう言うてはるん？

大将… 嫁はんに言われる、いうてたもん。お父さん、そんなん、毛伸びてへんやん、いうて言われる、いいよつたもん。ちゃうねん、伸びてるとか伸びてへんとか、ちゃうねん。

僕… それが、やつぱり、上得意さん？

大将… ああ、まあ、上得意やなあ。二〇日… 一〇日とか一五日に一回来る人なんか上等や、最高や。

僕… だいたい、平均したら、朝、何人？

大将… そら、一人の時もあるし、二人の時もあるし、いろいろや。

僕… 昼からは？

大将… 昼から、全然来えへんときある。多いときは、五、六人来ることがある。

僕… 夕方は、何時まで？

大将… 夕方？ 七時。六時になったら来えへん、だれも。七時になったら閉めのんに、六時になったら誰も通らへん。

予約制には、ぜったいしない、と、これまでに何度か聞いていた。その話を出す、と、大将が持論を展開する。

大将… 予約制にしたら、その人をその時間に、絶対に刈らないかんてしよ、ね。ほな、このへん歩いてきて「店内に入り」「今、散髪できるかな

あ」と言われて、断らなあかんやん、そのお客さんを。それは、僕はもったいないから、予約制にせえへんねん。

僕 …もったいない、いうよりも、悪いなあ、ということ？

大将…悪いなあ、いうて、せつかく覗いてくれたのにな、帰らすのも、嫌やろ。まあ、あれやな、予約制にしたら、その人の時間、一時間、置いとかないかんからなあ。

僕 …そうやな。四〇分で終わっても…

大将…そう。一時間で終わっても一緒。

予約せずに入ってくるお客さんに帰ってもらうのはもったいない。そして、ある時間を予約で区切ってしまうと、延長することはできないし、短縮できても別のお客さんを散髪することもできないので、これももったいない。

では、いった何人ぐらいの顧客を持っているのだろうか。

僕 …ここに来ている人って、何人ぐらい？

大将…そりゃ、四、五百人おんのちゃう？ 四、五百人、おらなあ…メシ食べられへん。

僕 …え、そんなにいるん？

大将…うん。それがうまいこと、月、月に分かれてな。ぼろぼろ、ぼろぼろ来てくれるわ。そら、それくらい、上得意、持つとかな、散髪屋、しんどい。そやからね、散髪屋、全然知らんとこで開店しよとするやん、新しく。ほなね、五〇〇軒あつたら、ええねん。店の周りに。

僕 …エリアが。

大将…うん、エリアが。五〇〇軒あつたらええんや。五〇〇軒、エリアに家があつたら、やっていけんねん。

僕 …そんな話を、昔々聞いたん？

大将…昔から決まってるなあ。そう言われた。

数百人の顧客。意外であつたが、冷静に考えれば、それぐらいは必要なのだろう。

とはいえ、全部が近所の人ではない。「そら、この辺の人は、たいがい多いけどな、ま、一応は。多いけど、三田<sup>さんだ</sup>のほうからでも、車で来てくれるからな、ありがたいな」という。「ファン」というか顧客のエリアも意外に広いものである。

### 三、出店と自信

このお店は、開業して四三年である。大将が大学生の時に、お兄さんが散髪屋をしていたのがきっかけになった。そこに手伝いに行くまでは、サラリーマンになろうと思っていた。

僕 …散髪屋とか、ぜんぜん、思ってもみなかったん？

大将…思ってもみなかった。「お兄さんの店に」職人がおらへんかったから、庭掃きやら、刈った髪の毛掃いたり、タオル洗とか、そんなん、日曜日に、よう手伝いに行つとつたんや。

僕 …でもまだ、その時は、自分が散髪屋になんとかは思てなかった？

大将…普通のサラリーマンしよう、思てた。せやけど、「サラリーマンは気楽な稼業」って歌ではあるけど、散髪屋のほうが、ぼろいな、と、その手伝いに行つとつた途中で、思いはじめた。うん。頭刈つて三千円もろたら、ぼろいなあ、思たな。

それから散髪屋をめざした。専門学校に行き、免許を取得し、五年間「丁稚奉公」をした。そして今の場所に店を出す。通りを隔てて向かいに三階建てのショッピングセンターがあつた。現在はマンションになっている。

大将…人、嫌でも集まるやん。人が通るやん。嫌でも来てくれるやん。いっぺん、どんなかなあ、思て、お客さんも、分からんけど、寄るや

ん。そいで、よかつたら…よかつたら、寄ってくれるやん。

僕…その、よかつたら、が、やつぱり一回一回が…必死やったん？

大将…必死やで、そらあ。そら、そやんか。必死やで。ここで店出す時、三人子供おったもん。

この店をはじめた時に、自分の仕事について自信があつたのだろうか。それを聞いてみる。

大将…いや、そんなあ。はじめから、自信はないけど、なあ。徐々に、やつぱり、自信は、できてくるわ。何年か、たつてつたらな。

僕…いつ頃、おれは、いけるなあ、と思いました？

大将…いや、もう、そこから、俺は、五年目で店持ったやん。

僕…あ、その、店出す時点で、これはいけると…

大将…そりゃ、そやん。そやないと、自分で店出せる気分にならんことには、ほんなん、看板出されへんやん。あんなとこ行つても下手や、言われたら…そんなん噂たつたら、うわーと広がるやん。ほな、もう、絶対あかへん。

店を出したら、毎日一人一人の散髪に自信を持つて臨む。客が判断するのは、自分に対する散髪という毎回の仕事だけである。それを四三年のあいだ、積み重ねていく。

僕…やつぱり、俺、うまいな(笑)と思う？

大将…いやいや、俺はうまいな、と、そこまでは思わへんけど、うん。

僕…でも、自信持つてはるやん。

大将…ま、自信持つてるよ。そら、自信持つてな、できひんよ、うん。そら、絶対、自信持たなあかんねん。何でも、そやん。絶対、自信持たな、あつかいな、そんなん。自分が、仕事を、絶対、誇りに思つとか

な、あかんよ、うん。な、人に負けるかい、ちゅようなもんでな。

四三年目の今、そう話す大将は、鏡の中でテキパキと仕事をしている。話と仕事というまったく別の作業が、完全に両立している。

#### 四、「俺に任せてくれる」―散髪の方法

次に聞いたのは、散髪の方法である。

まず、大将は、どう刈るかを自分で決めてしまう。客はそれに任せるしかない。明確な方針として持っている。

大将…初めて来た人でも、バリカン入れるか、入れへんか、聞くだけ。バリカン入れる、という人は、短くしてほしい。バリカン入れへん人は、やつぱり、長めに刈るからな。

僕…まず、そこで二手に分かれる？

大将…二手に分かれる。で、バリカン入れへん人なんかは、どれぐらいの刈り方してええんか、まあ、こつちが想像して、この人はこれぐらいのほうが似合うとか、それをバツと見極めんねん。ほなら、その人、こんど、次、絶対来るから。そういうように刈つたら。

僕…どうしましょうか、とは、聞かない？

大将…絶対、聞かへん。

散髪は、客が髪を切ってもらいに行くのであるが、この店において、どう切るかは、大将が判断し、客は全面的に委ねている。

大将…「この店にいた」前の職人は、ぜったい聞くからな、初めて来たら、俺、それ嫌やねん。そやから、俺とこ、いっぺんでも入つてくるやん、ゼッタイ覚えてるからね、何年、来えへんでも。

僕 ……すごいな。

大将…「いやいや、すごいよ。」

僕 ……それは、要するに、顔、頭のかたち？

大将…「うーん、毛自体やな。」

僕 ……毛の感じ？

大将…「毛のやらかいか、かたいか、そういう感じかな。」

僕 ……顔が大きいとか小さいとか。

大将…「ああ、それもあるよ。」

僕 ……面長とか、丸顔とか。

大将…「面長やつたら、ちよつと、こう、丸めに刈らんことには、余計、顔が細く見えるから。うん。それはあるよ。そやから、その人の感じ見てな、うん。皆、よう言いよるわ、刈り方を聞かんと、よう、それで刈るなあ、いうて言いよるけどなあ。俺は、それは、ぜつたい、ほんま聞かへんわなあ。」

僕 ……それは、もう、若い時から？

大将…「若い時から。絶対。もう、どんなお客さん来ても、もう、だいたい見たら分かるもん。」

この大将の方針は確固たるものである。

大将…「お客さんに」聞いたらかおかしやろ。自分がもう、免許持って、プ

ロやねんから……聞く必要ないと思うで、俺は。

僕 ……でも、その人が、ひよつとして、今日はこうしてほしいかなあ、とか

……

大将…「それは言いよるよ。ほなら、今日は、いつもより、もうちよつと短して、とか。夏場やつたら、いつも刈ってるより、ちよつと短か刈ってなあ、て、言う人おるよ。ほな、そういうように、ちよつと短めに刈るやん。うん。ほな、もう、それで、気に入っちゃうやん。そんなもん

やん。

僕 ……大将に任せられる、というのが……

大将…「そう。お客さんが俺に任せてくれる、いうのが、一番嬉しいな。うん。いちいち、そこ、もうちよつと刈って、とか鏡見て言う人おるわなあ。」

僕 ……やつぱり、おるん？

大将…「おる、おる。いや、あんまり刈ったらおかしいで、言うて、俺は、パーンと言うもんや。うん。絶対言うから。向こうに、ウンと言わすから。」

僕 ……正解を持つてはるんではよ？

大将…「そりや、そうやん。正解持つてるよ。そやないと、言われへん。お客さんは、こういうのがええでつて、パツと頭から言うやん。……ほなら、お客さんも、ああ、そうかなあ、思て。店出したら、自分の判断で、あなたはこういう頭のほうがええで、とか言うのは、強引に言わな、あかん。」

僕 ……年配のおっちゃんでも？

大将…「ああ、なんぼ年配でも。そんなん気にしとつたら、あかんやん……歳いつても、若うても、関係なし。……そやけど、それ言えんのは、ちよつとむずかしいけどな。弱気ではあかんで、ぜつたい、自分のこと言い通さな。そりや、そうやん。なんや、この人、自信ないんかな、ちゆうようなんやん、相手から言わしたら。そらあ、あかんで。なんせ、自分が自信を持つて……あ、あの人言うてんな、と言わさな、思わさな。」

僕 ……別のところ「散髪屋さん」でやってた人が、入ってきて、大将がみて、

あ、これはこうしたほうがいいな、と、変えていった訳ですか？

大将…「俺が、その頭見て、あ、この人は、こういう刈りかたのほうがええから……来た人も、任せてくれようわ。うん。ほなもう、俺の好きなように刈れるやん。うん。」

僕 … やっぱ、僕も含めて、みんな、余所に行つてた人が、ここに来て、大

將に、また一から、一番似合う…大將が一番似合うと判断する髪型に

…

大將…そう、する訳や。うん。

僕 … で、それが、気に入らんかったら、もうその人は来ない。

大將…来えへんな。

僕 … ほなら、二回目、三回目と来だしたら…

大將…もう、こっちのもんや。

僕 … もう、ほんまに、余所行かれへん。

大將…そやろ。絶対、行かれへんて。そりや、そんなもんやで。

僕の体験でも、どうしようとして聞いてきたり、刈った後で鏡を組み合わせて、「これくらいでどうです?」と、すその長さなどを確認する散髪屋もあった。ここの大將は、「任せてくれるのが一番嬉しい」と明言した。

それは、言うまでもなく、相応の技術を持っているという自信があるからである。修行時代のことと語ってくれた。

僕 … 誰に教えてもらう訳でもないんでしょ?

大將…そうや。自分で考えるんやで。人の刈ってるのを見て、盗むんやで、

結局。悪う言うたら。それを、自分が応用して、刈る訳や。

僕 … 自分が刈つてない時も、考えてる訳や。

大將…そうや。絶対、職人さんの後ろに立つて…ちよつと、じゃまにならん程度に、立つて…じいつと見てるもん。あー、あそこが、こういうように櫛ええん「入れる」ねんなあー、な、あそこは、ああいうように、バリカン入れんねんなあ、つて。それ見てるもん、ずつと。それからもう、丁稚の時、そないして見とかな、どないも出来ひんもん。何にも、することあらへんもん。あと、タオル洗い、とな。そんなんだけやろ。で、タオルを洗で、で、今度、タオル洗い。それが終わった

ら、こんどは、あの、あれや、シャンプーや。

僕 … ああ、段階として。

大將…そう。それで、だんだん、上にあがっていく。もう、シャンプーしないで、こう、襟やら、顔剃れるようになったら、まあまあ、できるかなーっていう感じやな。

僕 … でも、やっぱり、髪の毛をいじるんが、メインでしょ?

大將…一応は、な。うん。一応は、髪の毛、いじるけどな。でも、あと、セツトなんかは、職人に任すけどな。やっぱ、上の人に任すけどな。せやから、乾かすまで。シャンプーして、乾かすまでは、俺がして、ほいで、あとのセツトは、職人がしてくれるからな。

僕 … それを、じつと見てる?

大將…そう、それも見とかな、あかん。どういうふうにならシ入れよかなあ、と思てな。うん。ほな、ブラシの入れ方で、毛が、ぴゅつと寝る時と、寝えへん時あるからね。うん。そやから、そういうの、見とかな、やっぱり、あかん。

僕 … その時、当たり前やけど、必死やったわけですよ?

大將…必死やな。はよ一人前になりたかったからな。うん。はよ行つて…俺はもう、大学卒業してるから…結局、歳いつてるやん。皆、中学から行つてるやろ。ほな、もう、七、八年の差があるやん。そやから、一日でも早う店持とうと思うの。そやから、研究はしてるよ。

僕 … やっぱり常連さんが、あ、また…ここ、ちゃんとしてるから、ちゅうのが一番?

大將…そりや、まあ、そやろなあ。そら、それが一番やろなあ…

大將…でも、しんどいよ、この仕事は。そら、先生してるほうがええで。氣遣うよ、そらあ。そらもう、氣は、ぜったい遣うわあ、うん。もう、一番氣を遣うのは、顔剃り。

大將は、僕が前のお客さんに話を聞いていた時に、そのお客さんが話をするたび



に、僕のほうを向くので頭が動き続けたことが、いちばんやりにくかったと言う。特に髪のカットと顔剃りである。

僕 … 一番いいお客さんは、こう「まつすぐ座って」動かさずに：

大将… ああ、もう、じいと：

僕 … 黙っ座ってるのが一番：

大将… 目、つぶってくれるのが一番ええ。こないして座ってな。ほな、こっ

ちも、しゃべらんでええやん。それが一番ええ。もう、そら、ほんま

… … あなたにだけは、言うけど… … ほんま、もう、そんな人がいちばんええわ。けど、そんな人ばかり、ちゃうやん。

コミュニケーションをとるということ、散髪の仕事とは、厳密に言えば相容れないことになる。いわゆるチェーン店では、あまり会話をしないとすれば、ただ黙々と散髪だけをする。そのほうがやりやすい。あくまで散髪のために散髪屋さんに行くのであれば、それで十分である。しかし、一〇分や二〇分では、目をつぶって休むことはできないだろう。会話をすることもないだろう。

いつも同じ人によってもらい、二人の関係がでかあがる場所が散髪屋さんなのだろう。

## 五、一 対 一

散髪屋さんという空間は、一対一の関係が、その都度生まれては消える場所である。この日も、僕が突然に話を聞いた先客が店を出る瞬間に、大将がすかさず声を掛ける。

客 A … 「大将に」じゃあ、また。（扉を開けて出る）

大将… はい… 傘、傘、傘。

客 A … （扉の中に戻り、傘立てから傘をとる）これが、もう、年いったこと

… …

僕 … ははは。

大将… ほんまや、気づけて。

客 A … ありがとうございました。

大将… はい。

この日は、朝、雨が降っていたが、一一時前にはやんでいた。傘を忘れやすい状況であった。大将の神経は、そこまで行き届いている。

そして、すぐに僕の番になる。眼鏡をはずして椅子に座る。

僕 … ちょっと本格的に取材をしようと思て。

大将… それ、何、文章を作るの？

僕 … うん。

大将… なあ。

僕 … うん、全部、あの、字にして… …

大将… それをどういうふうに… …

僕 … 大学… …

大将… 出すの？

僕 … とりあえず大学の論文集に載せて… …

大将… ああ、論文に。

僕 … で、ひよっとしたら、何年後かに本を出したいなあと思つて。

大将… ほお。

僕 … 『散髪屋さん』という本を… …

大将… ほんなら又吉やな。

僕 … あ、そうそう。

大将… な。又吉風やな。

僕 … さすがやなあ… …

この年、お笑いコンビ「ピース」の又吉直樹が書いた『火花』という小説がベストセラーになり、七月には芥川賞を受賞した。本を出すと聞いて、すかさず大将の口から「又吉」と出てくる。

一人ひとりの客と一対一の関係をつくっていく。その瞬間瞬間の大将の対応と発言にどれほどの神経が使われているのかが分かる。

僕 ……ほんまに一回づつ、真剣勝負やん、当たり前やけどさあ(笑)。みんな、一回づつやってもらうのが、いいかどうかで…

大将…うーん。

僕 ……気にいらんようになったら、もう、やめるやん。

大将…そうやなあ。やつぱり、その人の…やつぱり、話して、うまいことフィーリングおうたら、また来てくれんのちゃう？　しゃべるのも、適当にしゃべって、な。もうこれぐらいでええかと思て。もう、しゃべらんようにすんのも、ひとつのテクニクやろなあ。うん。あんまり、べたべた、はじめから終わりまで、しゃべったつたら、ちよつとなあ…お客さんも、しんどいやろ。

僕 ……ずっと来てる人のなかで、全然しゃべらん人もおる？

大将…おるよー、もう、座つたら、もう、目つぶらはるわ。ほな、もう、そんな人は、僕、ぜつたい、しゃべっていかへんねん、うん、しゃべりに持っていかなんねん。お客さんは、うちへ来て休憩しようと思てるから。散髪屋行ったら、寝れる、というね。やつぱ、会社とかそんなところ行つてはる人やつたら、それは思うやろな。そやから、僕はもう、そういう人には、はい、いらつしゃいませ、言うて、それで終わりや。一言もしゃべらへんよ、終わるまで。はい出来ましたよ、言うて。もう、何にもしゃべらへん、うん、それでええねん、その人は。そいで納得いつてくれるから。絶対、また来はるもんなあ。それで、来てくれへんだら、いかなけどな、絶対来てくれはるもんなあ。

座った客が、話好きな人かどうか、より正確に言えば、今日は話をしたいのかどうか、何の話をすればいいのか。そうしたことを判断して対応する。

しかしながら、相手によっては口をきかないこともあるとはいえ、「口下手やつたら、あかん」「口下手はぜつたい無理」と大将は言う。

大将…いや、俺は何も、一ヶ月に来おうが、二ヶ月に来おうが、三ヶ月来おうが、そんな全然、気にしてへんから。来てくれたら嬉しいねん。

うん。

僕 ……それが、もう、ほんまに、飯の種やもん。

大将…まあ、なあ、飯の種やな。……そら、もう、そんなもんやで。……せやから、お客さんと、あんまり、なーなーになつてもいかんねんてー、うん。……そない言われたけどな、上の人には。

僕 ……ああ、そう。

大将…うん。あんまり、なーなーになつても、あかんてー、いうて。

僕 ……それは、なんでなんやろ。

大将…いやあ、あんまり、どないいうんか、何でもズバズバ、言うてもいいん、らしいで。僕はその、隠してんのが嫌やから、ぜつたい、もう、誰でも、どんなお客さんにでも、俺、ぶあーつと言うからな、正直に。ほな、もう、その人が、気に入ってくれる人がおるねん、その中にな。そやろ、そんなもん。

散髪屋さんというのは、その大将を気に入った人だけが来る店なのである。その意味において、大将自身が気をつけていることがある。

大将…あんまり年寄りに刈ってもらうの、嫌やろ？

僕 ……はははは。

大将…俺は、まだ、若いからな。あ、ここ、まだ、マスター若いな、ちゅようなもんやん。お客さんにしたら。

僕 …とても七〇に見えへん：

大将…な、見えへんやろ。せやから、得やねん。俺ら、若いから、格好が。パツと見て、一見、パツと見て、若そうに見えるから……年いっとても若そうに見えるから、来てくれるやん。

第一印象として若くみえることが、新しいお客さんを引き込むには重要だということである。店にはじめて入ってきた客に自分がどう見えるか、そんなところまで考えている。それが一対一の関係が成立するかどうかの決め手であるとすれば、この第一印象は極めて重要である。

## 六、雑 談

大将と常連客の一対一の関係は、完全な沈黙でないとすれば、いわゆる雑談から成り立っている。

この日の先客であった常連さんに、散髪が終わったあとも話を聞いた。

僕 …阪神の話とかするのは、やっぱり大将とするのが、しやすい？

客A…それは、気質<sup>きしつ</sup>ですわ。阪神ファンの気質で、みな、そんなんちゃいませ？ どこ行っても。飲みにいっても、そうでしょ。ちらつと阪神言うたら、「話に」入ってきますもん。ははは。

大将…そう。

客A…輪の中に、ね。

大将…ぜったい入ってくる。その話に合わすように絶対入ってきますもん、皆。

僕 …一番入りやすいんかな？

客A…そうでしょうね。話題として。

大将…ま、話題やったら入りやすいやろな。

僕 …で、さっき、僕、来た時に、台風がどうのこうの……天気の話は、だ

いたいみんなします？

大将…ああ。だいたいするやろな。

客A…テレビとか見とったら台風の流れ分かりますやん。いつごろ来るなあ、とか、そういう話をずつと……はははは、してる訳で。僕ら、テレビをみた感じを言ってるだけであらね。

大将…ああ、天気なあ……まあ…

阪神という地元の人気プロ野球チームのことと天気のこと。話題としては、それが適しているということは予想通りであったが、それだけではないようだ。

客A…それとやっぱりね、僕やったら二ヶ月に一回でしょ、で、ここに、おはようつて来ます。一番……いつつもね、八時に来ます。

僕 …あ、もう決めてはる？

客A…だいたいね。土曜日、日曜日。

大将…開けるなり来はるから。

客A…それは、はかったように、でも、今日はね、たまたまね歯医者さん行つたから、帰りに……で、もう、三日も休みでしょ、で、夏になつてくると暑い。

僕 …あ、ちよつとずれた訳やね。

客A…ちよつとね、髪の毛、伸びてきてるし、いっぺん行つとかなあかんあ、思て、もう行つとこ、ついでや。昼やったらすいてるかもしれん。それで……きつかけは、そやから、「お元氣やった？」って聞きはるでしょ。で「元氣です」て言いますやん。今日雨やのに、あ、また台風近い言うますなあ、いう話になつてきますやん。

大将…やっぱり、その状況？

客A…状況。

この「状況」ということばが、僕には意外であった。

大将…いつも一番に来る人が、こんな遅う来るやん。

客 A…「なんで、遅いねん」

大将…おれ、「なんで、そんな今日、遅いのん」いうて聞く訳や。

僕…え、今日は何時に来はったん？

大将…一〇時…

客 A…一〇時ちょっと回ったぐらい。

僕…じゃあ、もう、二時間も遅れてる訳や。

大将…いやいや、今日来る日、ちゃうねん。

僕…ああそうか。

客 A…僕はだいたい土曜日。

大将…だいたい土曜か日曜やねん。

僕…土日の朝八時。

大将…そう、もう、それ決まってる訳や。

僕…そんな人が今日来たら、びつくるする訳や。

大将…びつくりするよか、俺、そやから、聞くやん。なんでこんな時間に、

と思うて。絶対、言うもん。

客 A…歯医者さん行つて、ちよつと帰り。

大将…その帰り、な。

客 A…これ、伸びてきたし…

大将…帰ったらまたじゃまくさいやん、来んの、うち。

僕…ほんまやったら、この間の土日やった？

客 A…そうですね。

大将…そう、土日やったん。そやけど、用事があつたから来られへんみた

い。

客 A…お盆でしょ、みんな来てますやん、家族とか、娘の婿とか全部来てま

すから、この際、わし、「散髪に」行ってくるわ、とは……。

僕…そやね、そっち優先ですわね。なるほどなあ。

客 A…話の最初は、やっぱり身体のこととかね……ご主人はね、健康のため

いうて歩いてはりますやん。

僕…そうそう。

客 A…僕は、やっぱり歩くのはね、年いってくると腰が痛くなつてね、だか

ら、なかなか歩かれへんので、ほしたら「そうしたら」、病氣の話に

なります。

僕…ははは。

大将…そんな、年頃になつたら、なんねん、そらあ。

大将は、毎朝の散歩を欠かさない人である。こうして、この「取材」自体が雑談になつていく。

三人の話は、一〇日ほど前の高校野球で、百年目のイベントとして王貞治が始球式をしたことに移る。

大将…この間、王でもきれいに投げたやん、ばーんとな。

客 A…王さんよりは速いと思う。

僕…ははは、で、ストライクが入る？

客 A…入りますよ、で、受けますよ。打つの、負けへんかった、三振しなか

つたです、学校の時は。

僕…それ、いつの話です？

客 A…高校…二年、三年。

僕…ああ、そう。野球少年やった訳ですか？

客 A…そう。

大将…そやな。

僕…みんなそやつたんかなあ。

客 A…草野球。

大将…そや、草野球やん、昔やつたら。

客 A…そんな、高校野球つて、選手に、なかなか、なられへんかった。

大将…草がいつぱい生えてるところで、ボールとつて、受け取つて…

僕 …ほんまの草野球。

大将…ほんまの草野球や。

客A…学校でやつてるとき、僕、いっぺん失敗した。レフト守らされとったんです。守っとつて、で、あの、甲子園球場みたいな、きれいなグラウンドやったらよろしいで……でこぼこで、どこに石が転がってるか分からへん。

大将…ほんまやな。

客A…で、カーン打ちよつたやつが、三遊間抜けてレフトに飛んできたんですよ。

僕 …はあ。

客A…で、腰落とせ、て、いつも言われてるから、腰落としたら、「額に」コーン。

僕 …当たった？

客A…ここ「額」に当たった。で、ボールのかたがいつて、もう、一ヶ月ぐらい抜けへんかったですな。縫い目が、それも、こない（斜めに）入りよつた。旗本退屈男みたいな…

僕 …ははは。

客A…こないに入っただです、縫い目が。

大将…ああ、縫い目がな。

客A…とれへんかったです。

僕 …で、中は、頭の中は、何ともなかった？

客A…それはなかったですね。

大将…それ、ノウシントウやろ？

客A…ノウシントウいうよりも、どないやろ、目から火が出るというのは、あのこと言うんやろなと。

大将…ああ。

客A…カーンと当たって、カタンで倒れましたもん。

大将…あ、そう。

客A…きつかったしね。腰を落としてとらなあかん…

大将…そうか、イレギュラーしたんやな。

思い出話が、ここでまた阪神の話に移る。

僕 …こわいなあ、あんなん、まともに来たらね。

客A…そやからね、僕、いつも思うのは、ピッチャーがほつたやつがデッドボールで頭あたるでしょ。あれほんとにね、僕は…「阪神の四番バッターであった」田淵のあれ、見たんですよ、「テレビの」画面で。あの人、よう、あれ、後遺症残らへんかったなあ、思て。まともにですよ。

大将…ほんまやなあ、こわいなあ、あんなん。

客A…あの人も、そやから、瞬間、当たる瞬間まで覚えてる…当たった瞬間分からへん言いつたから、あと、打ち出したんですよ。

大将…そういうことやな。もう、当たった瞬間は、担架で連れていかれとんもんな。

客A…運ばれて…

僕 …田淵が？ 誰が投げてたん？

客A…あれはね、なんとかいうピッチャーや。もう相手のピッチャー忘れてますわ。はは。

僕 …え、田淵のそれって、そんな有名な話なんですか？

客A…阪神ファンやから、みな覚えてますよ。そんなん、ほんとに些細なこと…

僕 …いやいやいや、そういう話が面白い。…ありがとうございました。

もう店を出るタイミングだと、この先客は判断し、僕もお礼を言っで見送る。その時点で雑談は終わる。

結局、先客であった常連さんには、散髪のあいだ、ずっと話を聞いた。子どもの

頃は、丸坊主だったということ、空襲や戦後の焼け跡での草野球のこと、そしてプロ野球の阪神のことなど。夏の終わりに近い朝の小一時間、男三人で雑談をした。普段は一对一の雑談の場であり、散髪が終われば雑談も終わる。散髪屋さんは、そういう定期的な雑談の空間でもある。

## 結 び

さて、改めて散髪とは何なのか。この日、大将とそれに関わるやりとりもした。

大将…安いとこ行くやん、みんな。ここ「耳の上」に毛、ひつかからへんか  
つたらええ、いう人、ようけおるもん。ここのだけ、スカットしとった  
らええ、いう。ほなら、そこ「安いとこ」皆行く。

僕…やっぱ、この、耳の上？

大将…そう、そこ当たるか、当たたらへんか。そやから、後ろなんか、関係あれへんやん。

伸びてきた髪の毛の先が耳たぶの根元に当たる。それを切って短くしてもらう。散髪をするということが、伸びてきた髪を切るということだけであれば、それに特化した店があることも頷ける。

たとえば、一九九六年一月に一号店を開き、二〇一五年一〇月には全国で六〇〇店以上を展開する「ヘアカット専門店QBハウス」のホームページには、次のように書かれている。

通常、一般のサロンで行うシャンプーやブロー・シェービング等、お客様ご自身で出来ることはサービスに含まず、お客様が出来ないこと「カット」のみに特化したサービスを提供するヘアカット専門店です。お客様のカットに要する時間は、約一〇分。

(<http://www.qbhouse.co.jp/> 二〇一五年一〇月アクセス)

自分の髪をカットすることは、自分ではできない。他のことは自分でできる。そこに、散髪の本質があるのだろうか。

男性の多くは時間をとって散髪屋さんに出かける。

真正面に大きな鏡があり、あの椅子に座った自分が映り、散髪屋さんも映る。客は一人で、散髪屋さんも、交代することもあるが、常に誰か一人が一人の客の「散髪」をする。至近距離での一对一の関係である。客のほうは、あの椅子に座って白い布の下に首以外の身体を隠してしまい、文字通り、手出しができない。首から上を散髪屋さんに委ねる。散髪屋さんは、髪を切り、脇と顔を剃り、洗髪し、セットをする。要するに、首から上すべてををきれいにする。この間、終始口をきかない客もいれば、大将と話す客もいる。

鏡には、いつも二人だけが映っている。客は鏡の中の自分の頭しか見ることはない。やつてもらっている間も、終わってから、そして日常的にも、鏡の中の頭を見るだけである。

この同じことを、一カ月、二カ月といった一定の間隔で繰り返す。自分の身体の一部を、だれか他の人に任せる。命にかかわることではない。しかし、自分ではできないことである。

散髪屋さんはすべて理容師として免許を持っている。冷静に考えれば、どの散髪屋さんでも同じとも言えるのであろうが、実際にはほとんどの人が同じ散髪屋さんに行くはずだ。やがてそれは何年という時間のあいだに、習慣となり、日常となる。行くとともに「再会」し、近況をたずね、そして一時間弱のあいだ、雑談を交わす。あるいは、一言も話さずに過ごす。

散髪屋さんに行くということは、その繰り返しであるとはいえ、非日常の空間で過ごす時間でもある。

この日の散髪と「取材」は、約二時間ほどであった。

僕…また来ますわ。ありがとう。

大将…はい。

僕 … 長々、すみません。

大将 … 長いこと……傘。

僕 … あ、忘れそう…

大将 … すぐ忘れる。そんなだけ、もうろくしたら、あかん。

僕 … まだ若いのになあ……ありがとうございます。

客が店を出ていくまで途絶えることのない大将の気配りを背中に感じつつ、僕は散髪屋さんの扉を押して外に出た。三ヵ月後には、またここに来る。

（二〇一六年一月）

#### 付記

この店の大将と「客A」さんに、取材への協力を感謝します。大将には、この原稿に目をおしていただきました。ありがとうございます。

## An Extraordinary Space in Ordinary life :

### A Sociological Study of Barbershop (1)

HARADA Takashi

**要旨：**散髪は、多くの男性の日常的な行動のひとつである。髪の毛が絶えず伸びるために、自分の身体の一部について、一定の間隔で、専門家である理容師に手入れをしてもらう。

本稿では、ある店での客と理容師への取材をもとに、理髪店という場所について考察する。客は、場所と技術と相性をもとにして店を選び、同じ店に通うことが多い。理容師は自分に任せてもらった客の髪と頭を自分の判断で整える。散髪のあいだ、常連客と理容師は近況を中心とした雑談をする。理髪店は、一体一の関係の基本とする非日常の空間である。

**キーワード：**理髪店、社会学

**Abstract :** This is a sociological study of barbershop based on a interview research.

Most men go to barbershops at periodic intervals, once in a month or two. Each of us choose a barbershop which is close to our houses or workplaces. Whenever barbers touch our hairs or faces, they engages in a social interaction with us, which turns out to be a long term commitment. Both skill of the barbers and small talk are essential for interactions in barbershops.

So barbershop is an extraordinary place for us in our ordinary lives.

**Key Words :** barbershop, sociology